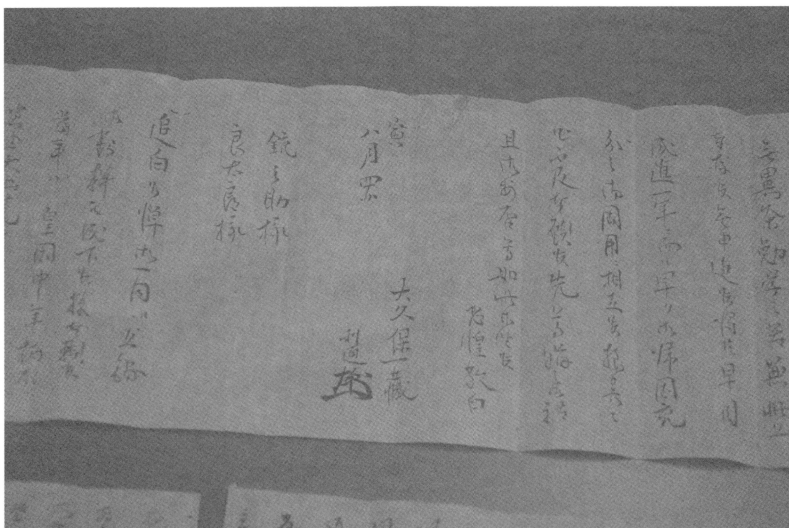
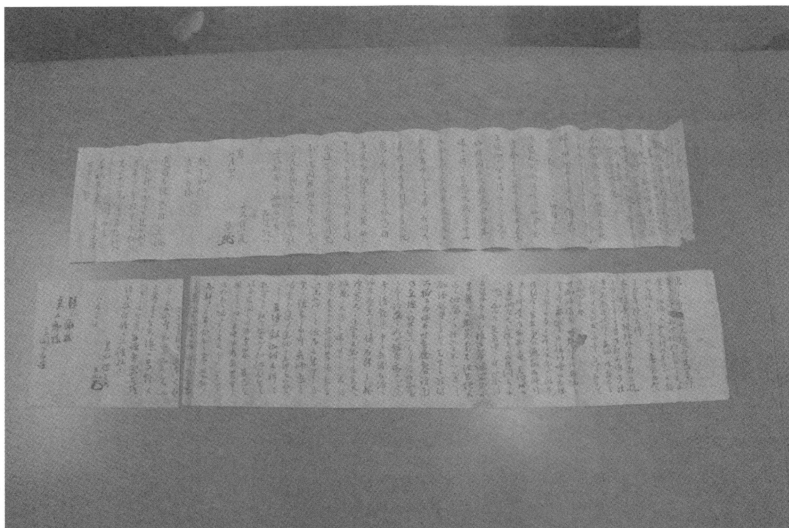


薩摩藩英国留学生宛ての大久保利通らの手紙について

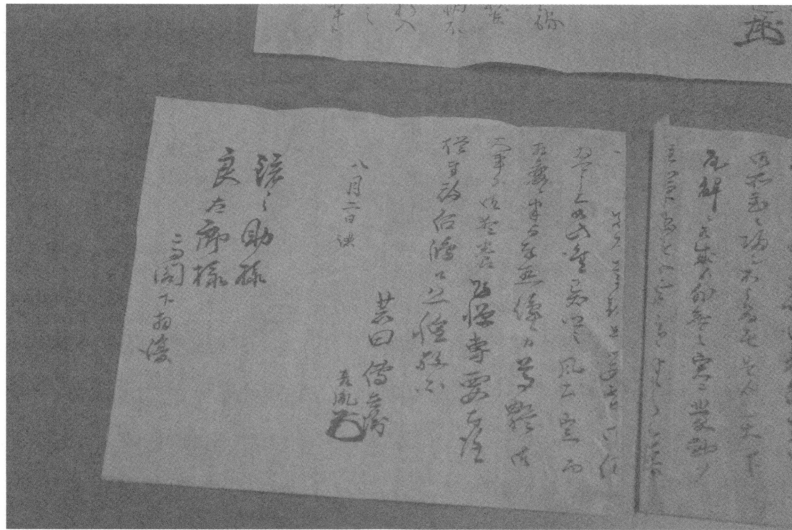
森 孝 晴

1. 留学生宛ての手紙が発見された経緯

2022年1月1日付の南日本新聞37面に「薩摩留学生へ「早く国の役に立って」 町田遺品から大久保の手紙」と題した比較的大きな記事が掲載された。名家出身の薩摩藩英国留学生で学生たちのリーダーでもあった町田久成（1838-1897）が晩年に僧籍を置いていた大津市の園城寺に保管されていた町田の遺品の中から、手紙が見つかったというものだ。



キーワード：薩摩藩英国留学生，大久保利通，町田久成，手紙



上記写真3枚とも南日本新聞社および園城寺提供

この記事は、大久保利通（1830-1878）が送った手紙と島津久光の側近蓑田伝兵衛（1812-1870）が送った手紙の内容を紹介し、薩摩藩が留学生に抱いていた大きな期待が読み取れる、などというコメントが加えられている。筆者の「手紙はプレッシャーを与えたはず」というコメントも添えられている。

2. 町田はなぜ手紙を持ち続けていたのか

薩摩藩から留学生に送られた手紙というのは、筆者が調べた限りでは一つも出てこない。にもかかわらず、これらの手紙を町田がなぜ保持し続けたのかがまず謎である。保持し続けた理由については、歴史学者の原口泉氏が上記の記事の中で「輝かしいキャリアの証しとして、手紙を最後まで持っていたのかもしれない」と述べているが、これは首肯できる。しかし、留学中受け取った藩の機密文書ともいえる手紙を生涯持ち続けたということには、他にも理由があったかもしれない。なお、町田はリーダーの一人だから、そういう文書を手許に置いていたとしても特に不思議ではない。

歴史学者の三木靖氏の意見を参考にしながら考えてみたい。三木氏によれば、薩摩藩英国留学生プログラムは「当時の藩政上、最大の事業であった」（平成27年度特別講演会解説冊子『鹿児島歴史の旅—島津藩政と「薩摩藩英国留学生」』）にもかかわらず、「島津藩はサツマ・スチューデントについての公簿を残していない」（同）そうだ。関係書類が多彩で、担当者の異動もあり、きちんとした公簿は作成されなかった、と三木氏は推測している。あとでも述べることだが、1866年頃は世の中が騒然としてきた時期だから薩摩藩も留学生たちの動向は気にしつつも、大きな関与をする余裕がなかった可能性は十分ある。

しかし、大久保や西郷に宛てた留学生の手紙がいくつも残っているのに藩側の記録史料や大久保ら首脳陣が留学生に宛て書いた手紙がない状況の中で、そうした資料が出てくればそれだけで十分ニュース性がある。なぜそういう手紙が出てこなかったのだろう。三木氏によれば「残存している文書はいずれもロンドンが発信地で発信者は変名を用いたサツマ・スチューデントがほとんど、受

信者も殆どが島津藩の最高責任者」(同)だそうだ。留学生からの書面の内容は藩への提言や留学の実務、そして経費の問題が中心であった。

実は、石垣鋭之助(新納久脩の変名)と上野良太郎(町田久成の変名)の連名で1865年8月4日付(旧暦6月13日付)の書面を大久保、蓑田、西郷に宛てて出しているが、その文頭に「去月三十一日付貴 披見いたし候(去月三十一日付の手紙を見ました)」(同)と書いている。したがって、藩の方から留学生たちに届けられた手紙が存在していたことは明らかだろう。しかし、筆者が調べた限りではそのような手紙は一通も出てきていない。まさにこの度、町田の遺品から出てきた二通の手紙が唯一なのだと思う。

では、留学生が送った手紙はいくつも出てくるのに、なぜ藩から留学生に宛てた手紙が出てこないのだろう。三木氏は「独特な対処がなされたことを反映している可能性がある」(三木氏メモより)とみている。筆者も同じ意見だが、もう一步踏み込むと、藩(の責任者)からの手紙はいわば機密文書で、他人に見られることを防ぐために、ロンドン側で処分されるのが原則、あるいは、決まりだったのではないだろうか。

そう考えると、今回出てきた二通の手紙は大変珍しい資料と言わねばなるまい。五代ら使節も、町田を筆頭とする留学生たちも、基本的にはこうした手紙は処分した上で帰国したと思われる。町田は留学生たちのリーダーであったが、実は五代や新納と並んで一行を代表するメンバーの一人でもあった。他の学生たちはともかく、町田はこうした機密資料に責任をもつべき立場にあったはずだから、それを廃棄せずに帰国時に持ち帰ったのはなぜだろうか。

その理由を考えると、①意図的に持ち帰った②たまたま荷物に紛れ込んでいた、などが考えられるが、②は、ありえない事とは言えないものの、現実性は低いだろう。①が正しいとすれば、何のためにわざわざ持ち帰ったのかという問いが生じてくる。しかも町田は二通の機密文書を死ぬまで持っていてわけだから、これらの手紙に対する深い思いを抱いていた可能性も浮上してくる。

原口氏は、前述の記事の中で「左遷や免職など、町田は挫折の多い人生を送った人物。輝かしいキャリアの証として、手紙を最後まで持っていたのかもしれない」と話しているが、そうした理由や思いを解明するには、藩から留学生たちに宛てて書かれた問題の二通の手紙の内容を詳しく見ていき、当時の時代背景や、留学生たちから薩摩に出された手紙類も見てみる必要があるだろう。

3. 二通の手紙の内容

一通目は、慶応2年(1866年)8月2日(旧暦)付の蓑田伝兵衛からの手紙で、受信者は新納と町田である。蓑田は島津久光の側役などを勤めた重臣であるから、この手紙は藩から留学生へ向けられた重要な文書である。内容については、西郷が在京中であることや開成所洋学校の学生が増えていることなどが記されているが、重要と思われる箇所は、長州征伐に触れた部分だろう。6月に起こったばかりの第二次長州征伐に言及して、幕府と諸藩が離反していることや長州藩の臨戦態勢の状況を伝えている。

もう一通は、慶応2年(1866年)8月4日付の大久保利通からの手紙で、受信者はやはり新納と町田である。大久保は留学生たちが勉学に励んでいることを評価した上で、前述の記事にもある通り「一年二而も早く御帰国充分之御国用二相立候様、呉々乍不及奉願候(1年でも早く帰国して、

十分に国のために役立つようにと、くれぐれも願っている)」と記されている。さらにこの手紙で、大久保も第二次長州征伐に触れており、長州藩の一致団結を「禍を転じて福となす」ものと紹介し、「敵国外患」が国（藩）の良薬になった、と述べている。

この二通の手紙のポイントになるのは、一つは、第二次長州征伐に触れることで薩摩藩を囲む日本の国内情勢が逼迫し騒然としていることを知らせる意図である。もう一つのポイントは、大久保の言葉からわかるように、藩が実施したプログラムで勉学に励むことを評価しつつも時間はあまりないので、できるだけ早く知識や技術を身につけて帰藩してほしいという、居ても立っても居られない心情であろう。

4. 時代背景と留学生たちの立ち位置

元治元年（1864年）8月に第一回長州征伐が行われ、長州は苦杯をなめるが、その結果長州藩と幕府の関係はきわどいものとなった。慶応元年（1865年）4月に薩摩藩英国留学生は密出国し、6月にロンドンに到着した。慶応2年（1866年）に入ると、薩長同盟が成立し（1月）一気に世情は騒然としてくる。6月には第二次長州征伐が幕府側の敗北に終わり、12月には徳川慶喜が第15代将軍となり、孝明天皇が死去した。この後は、慶応3年（1867年）1月のパリ万博を経て、同年5月には薩土条約が結ばれ、大政奉還を受けて、薩長を中心とする勢力が本格的に倒幕へと動き出すことになる。

では、留学生たちはどう動いたのだろうか。犬塚孝明氏の『薩摩藩英国留学生』などをもとにして時代背景と対比してみよう。実は、新納。五代、堀は慶応元年（1865年）12月にすでに帰国の途に就いている。政情をおもんばかっていたことだろう。したがって、大久保の手紙が着いた頃には新納はロンドンにいなかったのだが、大久保自身が京都にいたりして、新納らの動向を正確には把握していなかったと思われる。

一方の町田は、慶応3年（1867年）4月までロンドンに滞在した。この間、慶応2年（1866年）8月には6人の学生が帰国の途に就いた。町田自身は、留学生から建言書が出された時期の前後の慶応3年（1867年）5月にロンドンを離れている。最後までイギリスに残っていた6人（森や長沢など）は、同年8月にアメリカに渡り、ロンドンから留学生たちが消えた。

5. 留学生たちの心情について

時代が倒幕へと傾いていく中、ロンドンの薩摩藩英国留学生たちはどんな気持ちでいて、大久保らの手紙は彼らにどんな影響を及ぼしただろう。

まず、森有礼の手紙を見てみよう。『森先生伝』などによると、大久保らの手紙が届いた後の慶応2年（1866年）9月以降の兄横山安武宛ての手紙には、「人物を研究する」「汚魂を洗濯する」「体の養生は手を付」「冷水を以て総身を清潔にし」（すべて9月付）、「人情風俗を観察」「二三芸の学を学び伝習し」（12月付）など、全力で学んでいる様子が見られる。

また、『西郷隆盛全集』や冊子『鹿児島歴史の旅』によると、

①まず、慶応元年（1865年）5月29日付の手紙で、ロンドンへの無事到着の知らせが新納と町田か

ら大久保、養田、西郷に伝えられた。

②同年7月27日付二人からの桂久武（家老）、大久保、養田、西郷への手紙には、自分たちは長州の学生（長州ファイブのこと）とは違うとか、長沢はアバディーンに出発したとか、そういうようなことが書かれた。

③新納から桂への同年11月8日付の手紙では、英仏蘭見学の必要について書かれている。

④町田から大久保、西郷への慶応2年（1866年）3月17日付の手紙には、日本国内の政情についての意見が書かれており、兵庫港開港については「慎重に対処すべき」と警告している。

⑤同年7月15日付の町田から小松帯刀への手紙には、モンブランの活躍のことが書かれている。

⑥同年7月の町田から小松への手紙には、鹿児島に西洋流学校建設の議が述べられている。

このように、今回見つかった、大久保らの留学生宛ての手紙が出された時期の前後には、留学生たち特に新納、町田の手紙がいくつも薩摩藩に対して出され、様々な報告や提案が行われていたことがわかる。このことは、藩からも留学生たちに対してたびたび手紙が出されていたことを物語っている。

こうした経緯がある中で、今回見つかった手紙を受け取った側の留学生たちの心境はどんなものだっただろうか。その前にまず藩の側の思いを考えてみよう。上述の新聞記事の中で徳永和喜氏は、この手紙に表れた大久保らの気持ちについては「留学生に対する期待の大きさを表したのではないか」と推測しているが、筆者もその通りだと考える。そこには、留学生たちの気持ちを焦らせないような気配りも見られるが、「一日も早く」と書いたり、第二次長州征伐のことを持ち出したりしていることから考えて、そこには、留学生たちに期待する大久保たちの気持ちと、しかし当時の政情から考えると時間の猶予があまりないことへの藩の上層部の焦燥感も感じられる。

では、こうした手紙を受け取った留学生たちはどう感じただろう。おそらく、これら2通の手紙は、残っていた学生たちに開示されただろうから、彼らの心情は激しく乱れただろう。現代の留学においては、1～2年ではあまり効果は上がらない。その意味では、留学生たちは、留学2年目にして示された大久保たちの期待を厳しいもので無理があると感じた可能性がある。ただ、彼らは藩から選ばれ藩を代表する秀才たちであったから、2年余りの留学から戻った後は、幸いに大きな成果を上げることができた。彼らは帰国後藩を支え、戊辰戦争を戦い、新政府のために尽くし、はたまた外国にあって大きな功績を残した。

つまり薩摩藩英国留学生たちは、薩摩藩の最高責任者たちから上記の2通の手紙のような、激励しつつ一方ではお尻をたたくような手紙をたびたび受け取りながら、それに必死に応えようと頑張ったに違いない。もし藩からお叱りを受けるようなことがあれば、それこそ切腹ものなのだ。留学プログラムと言えは聞こえはいいが、藩主の命令に基づいて必ず成果を上げなくてはならない、名誉と言えは名誉だが、家族にとっても本人にとっても命がけの使命なのであった。現代の留学生には到底理解しえない真剣勝負だったから、大久保ら藩の最高責任者から届く手紙の内容は、故郷から届く懐かしいものである以上に、心にずしりと降りてくる重いものであったろう。

謝辞

1. 貴重な写真をご提供いただいた南日本新聞社と天津市の園城寺に心よりお礼申し上げます。

2. 貴重なご意見とご助言をいただいた三木靖氏（鹿児島国際大学短期大学部名誉教授）に心より感謝申し上げます。
3. ご協力をいただいた南日本新聞社の野村真子記者と桑畑正樹データベース部長に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 犬塚孝明 (1974). 『薩摩藩英国留学生』 東京：中公新書.
—— (2013). 「長沢^{かなえ}鼎—祖国近代化のはざままで—」『新薩摩学 知られざる近代の諸相 変革期の人々』 鹿児島：南方新社.
- Japanese American Curriculum Project, Inc. (1985). *Japanese American Journey The Story of A People* San Mateo, California: JACP, Inc.
- 原口泉 (2019). 『薩摩藩と明治維新』 鹿児島：志学館大学出版会.
門田明 (1991). 『若き薩摩の群像』 鹿児島：春苑堂かごしま文庫 1.
門田明, テリー・ジョーンズ (1983). 『カリフォルニアの士魂—薩摩留学生・長沢鼎小伝』 東京：本邦書籍.
Kadota, Paul Akira and Terry Earl Jones (1990). *Kanae Nagasawa—A Biography of a Satsuma Student—* Kagoshima: Kagoshima Prefectural Junior College.
上坂昇 (2017). 『カリフォルニアのワイン王 薩摩藩士・長沢鼎—宗教コロニーに一流ワイナリーを築いた男』 東京：明石書店.
木村匡 (1987). 『森先生伝』 東京：大空社.
「九州の王様たち その軌跡」『九州王国』 2021年5月号. 鹿児島：エー・アール・ティー株式会社.
LeBaron, Gaye & Bart Casey (2018). *The Wonder Seekers of Fountaingrove*. Historia II Publication.
三木靖, 向山勝貞 [編] (2003). 『街道の日本史54 薩摩と出水街道』 東京：吉川弘文館.
宮下亮善 (編) (2009). 『西郷 (せご) どんと薩摩士風』 鹿児島：西郷隆盛公奉賛会.
森孝晴 (1998). 『椋鳩十とジャック・ロンドン』 鹿児島：高城書房.
—— (2014). 『ジャック・ロンドンと鹿児島—その相互の影響関係』 鹿児島：高城書房.
—— (2018). 『長沢鼎 武士道精神と研究者精神で生き抜いたワインメーカー』 鹿児島：高城書房.
—— (2020). 「日本ワインのルーツに長沢鼎がいる可能性について」『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告17』 鹿児島：鹿児島国際大学ミュージアム.
—— (2021). 「ワイン王とポテト王—長沢鼎と牛島謹爾」『鹿児島国際大学国際文化学部論集』 第22巻, 第2号. 鹿児島：鹿児島国際大学.
—— (2021). 「長沢鼎と伊地知家」『鹿児島国際大学国際文化学部論集』 第22巻, 第3号. 鹿児島：鹿児島国際大学.
- 森孝晴, 三木靖 (2016). 『鹿児島歴史の旅—島津藩政と「薩摩藩英国留学生」—』 (平成27年度特別講演会・かごしま県民大学中央センター連携講座解説冊子) 鹿児島：鹿児島城西ロータリークラブ・鹿児島国際大学
- 長沢鼎 (1871). 『長沢鼎日記』 申木野：申木野市役所保管.
—— (1980, 1994, 1997, 1998). 『長沢鼎日記』の翻刻『鹿児島県立短期大学地域研究所「研究年報」』 第9号 (1980年), 第23号 (1994年), 第26号 (1997年), 第27号 (1998年).
長沢鼎常設展示室兼資料室所蔵資料 (鹿児島国際大学内, 約400点)
新渡戸稲造 (1993), 奈良本辰也 (訳). 『武士道』 東京：三笠書房知的生きかた文庫.
—— (2009). 奈良本辰也 (訳). 『英語と日本語で読む「武士道」』 東京：三笠書房知的生きかた文庫. 原著は1900年に出版.
- Nitobe, Inazo (2007). *Bushido The Soul of Japan*. Tokyo: IBC Publishing, Inc.
- 野田幸敬 [編著] (2019). 『系図研究資料 島津家家臣団系図集 上巻 各家各氏一族分出略系図』 鹿児島：南方新社.
- 大久保利謙 (編). 『森有禮全集 第3巻』 東京：宣文堂書店.
多胡吉郎 (2012). 『海を越え、地に熟し 長沢鼎 ブドウ王になったラスト・サムライ』 東京：現代書館.

鷲津尺魔 (1933). 『長沢鼎翁伝』: 鹿児島国際大学蔵.

渡辺正清 (2013). 『評伝 長沢鼎 カリフォルニア・ワインに生きた薩摩の士』. 鹿児島: 南日本新聞開発センター.